

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 キム 金 ミジン 美眞

本論文は、江戸後期の戯作者である柳亭種彦（1783～1842）の合巻作品の特徴について、近世初期風俗の考証、演劇趣味、古典研究等との関係を中心に、多方面から考察したものである。本論文の構成は、巻頭に序論を置き、次いで第一章「種彦の合巻と考証」に「『骨董集ほりかひ』考」等の三節、第二章に「種彦の合巻と演劇」等の三節、第三章に「『修紫田舎源氏』論」等の三節を配し、末尾に結論を添える。

第一章は、種彦の考証随筆や雑記を精査し、種彦の合巻作品には自身の近世初期風俗・近世初期文化についての考証の成果が取り入れられていること、具体的には、『灯籠踊秋之花園』には灯籠踊りの古図に関する、『娘金平昔絵草紙』には近世初期俳諧に関する、『傾城盛衰記』には近世初期の俗語・俗諺に関する、それぞれの考証的研究の成果が生かされており、しかもそれらが全体の構想に関わったり、筋の展開に関与したりするような重要な役割を果たしていることを初めて明らかにする。

第二章は、先行演劇から強い影響を受けている合巻作品を取り上げ、『曾我太夫染』では典拠である近松門左衛門作の歌舞伎作品を書き換えるに当たり、古風と当世風を共存させていること、『女模様稲妻染』では同じ大津絵の趣向を用いながらも、式亭三馬や山東京伝の合巻が大津絵から絵が抜け出る「大津絵絵抜け」を取り入れたのに対し、種彦は登場人物が大津絵の画題に扮して歌い踊る、大津絵の所作事になぞらえていること、また『鯨帯博多合三国』では先行する浄瑠璃や歌舞伎に影響を受けながらも、近世初期に流行した裏表の色が違う「鯨帯」に付会して、一人の登場人物の表裏二つの顔を描くこと等、種彦が様々な工夫をこらしていることを明らかにする。

第三章は、『修紫田舎源氏』を執筆するに当たって、種彦が北村季吟の『湖月抄』や本居宣長の『源氏物語玉の小櫛』等を精読しながら『源氏物語』の本文考証を自らも行い、その上で『修紫田舎源氏』の本文を書き挿絵を描いていること、その創作手法は、近世初期風俗や先行演劇作品の考証を行った上で書いた作品と同じであることを明らかにする。

従来、小説と考証随筆の関係を論じた研究は、山東京伝の事例を扱ったものがいくつかある程度であったが、本論文は、京伝や馬琴をしのぎ、戯作者の中で考証に最も秀でた種彦の作品を正面から扱い、その考証の成果を小説に取り込む際の多様な方法を初めて明らかにした。しかも『諺の通』等は、種彦研究において、本論文で初めて用いられた新資料である。今後は、合巻以外の作品、例えば読本作品でも考証随筆と密な関係があるのか検討を要するが、それはともかく、種彦の合巻と考証的研究の関係を精査し、両者の重要な関係を明らかにした本論文は、種彦研究を新たな段階に導くものとして高く評価できる。よって、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断した。